えんげき

フーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
えんげき

【Ｎコード】
Ｎ２５７８Ｒ

【作者名】
フーマ

【あらすじ】
演劇部の日常を緩く書いた小説です。
稚拙ですがよろしくお願いします。

部活

ある日の放課後。
二人組の男子がある場所に向かっている。

「部活怠いな」
と怠そうに言ったのは坂井（さかい）　浩斗（ひろと）
長身で整った顔立ちをしている。

「だな」
もう一人の男子、斉藤（さいとう）　京也（きょうや）が同意した。
京也は平均的な身長で特に目立った特徴もない。
所謂普通の生徒だ。

二人は中学時代からの友人でこれから部活の様だ。

しばらく廊下を歩くと彼等が部活を行う部屋に着いた。
その部屋には演劇部と書かれている。

その部屋の扉を開けると数人の生徒がいた。

「ちわ」
っと二人は部員に挨拶をする。

「よく来たな、待っていた」
と二人を迎えたのはいかにも不良といった見てくれをしている男子、
菊地（きくち）　葵（あおい）
髪には白いメッシュが入っていて服装はかなり崩れている。

「なんでお前そんなに偉そう？」
腕を組んで堂々と経っている葵に質問する浩斗。

「それはオレが偉いから！」
きっぱりはっきりバッチリとふざけた答えが返ってきた。

「寝言はくたばってから言え！」
そう言って京也が葵の腹を殴った。

結構重たいパンチの様で葵は殴られた所を押さえている。

「出た！京也の必殺３連パンチ！これを食らった人間は３日以内におだぶつ」
なんとも恐ろしい技の説明をしている浩斗だ。

「いやだ！死にたくない！グフ…」
葵はそう言って地面に伏した。

「さて、部活を始めるか」
何事もなかったかの様に部活を始める京也。

「斉藤君、そうやってすぐに人を殴るの駄目だよ！」
そう京也に注意したのは山口（やまぐち）　遥夏（はるか）

大きな瞳が特徴的な少女だ。
長い髪を頭の後で結んでいる。

彼女は浩斗、京也、葵と同じ一年生で学年のアイドル的な存在だ。

「悪いな。どっかの馬鹿がとんでもない事を言ったからついつい」

「それなら仕方ないね。じゃあ部活はじめよ」
今まで怒った様な顔をしていたが理由を聞いて納得し、早速部活を開始する。

演劇部はあまり部員がいない弱小部だ。

その部活の目標は演劇の発表会で上位になる事だ。

部活は発声練習をしたり短い話しを使って演技の練習をしたりする。

「あれ？先輩達は？」
浩斗は先輩達がいない事を疑問に思った。

「真季さんも鈴さんも委員会で遅くなるってさ」
と遥夏が答えた。

「なるほど」
納得して頷く。

「発声練習も終わったし、３人で何するんだ？」
京也は鞄からペットボトルを取り出しながら二人に問いかけた。

「３人じゃない！オレを忘れるな！」
今まで地面に伏していた葵がムクッと起き上がり三人に近づいてきた。

「お前はほら、モブだから数える時には含まれないんだ」
と、少し笑いながら浩斗が言う。

「ヒドッ！オレ、モブだったのかよ！こんなに存在感あるモブってなんだよ！」

「モブのくせに前に出ようとする常識はずれなモブか…w」
愉快そうな笑みを浮かべながら呟く京也。

「wっておい！何これ、イジメ？遥夏ちゃん～！みんながいじめる」
遥夏に助けを求めた。

「目立つモブ…www」
遥夏は遥夏で爆笑していた。

「こっちの方がひどい…」
周りの反応を見てガッカリした葵はその場にひざまずいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2578r/

えんげき

2011年10月8日19時46分発行